

野外観察による『抱っこ』の研究

岩田 浩子・犬飼 博子*

How Parents Carry Children in Their Arms: A Field Study

Hiroko IWATA and Hiroko INUKAI

Abstract

In order to clarify how parents carry their children on the chest in their leisure time, a total of 241 couples and their children were photographed at the Higashiyama Zoo, the Nagoya Port Park and the Ueno Zoo both in summer and in winter. The number of parents who carried their children on the chest was 251 (176 fathers and 75 mothers). A few parents used a baby-carrier. Some parents held their children with one arm. Other parents (219, or 87.3%) used both arms to hold their children. Among them, seventeen patterns of child-carrying style were observed. More than half of the parents (126, or 57.5%) carried their children in a face-to-face position. Others showed a face-to-side position (83, or 37.9%), or a face-to-back position (10, or 4.6%). The lateral preference was different between the mothers and the fathers. The mothers preferred carrying on the middle or the left side of the chest; however, the fathers had preference for holding on the middle or the right. The arm position of the parents was different according to the age of the children. Most of the parents (191, or 87.2%) used their arms symmetrically to hold their children from the bottom; however, some parents (16, or 7.3%) placed their arms in a parallel pattern around their babies or toddlers to support them firmly. The seasonal difference was seen in the child-carrying style. In summer, the parents held their children on either side or the middle of their chest using their arms rather freely. However, in winter, the parents tended to embrace their children on the middle using their arms symmetrically.

緒 言

わが国には『おんぶ』のような伝統的乳児運搬法があるが、一時的に子どもを運ぶときには『抱っこ』の方が簡単であるためか、最近ではおんぶよりも抱っこを見かけることの方が多い。本研究の筆者のひとり犬飼²⁾は動物園や遊園地で親子連れの観察を行い、『おんぶ』、『抱っこ』および『肩車』のような乳幼児運搬法がどのようになされているかを詳しく分析したが、抱っこが行われる頻度が最も高いと報告している。このように高い頻度で観察される抱っこは実際にどのように行われているのか。親子連れで動物園等に出かける場合、抱くのは母親よりも父親の方が多いこと、親と子が向き合う対面型の抱っこが多いことはすでに犬飼²⁾も報告してい

* お茶の水女子大学大学院家政学研究科(在学中)

るが、実際に子どもを抱く場合、(1) 子どもを抱く位置や腕の使い方に左右差はあるか、(2) 親の腕はどのように用いられているか、(3) 抱き方に父母による差や季節差、乳児を抱く場合と幼児を抱く場合の差はあるか、という点に関してはまだ明らかになっていない。本研究ではこの3点を明らかにすることを目的に、親子連れの観察を行い、余暇活動時の親子連れにおける抱っこのしかたについてその特徴を明らかにすることを試みた。

対 象 と 方 法

犬飼²⁾の夏の資料を今回の分析に含めて用いるため、方法は犬飼²⁾が用いたのと同じものにした。表1は夏の野外観察と新たに加えた冬の野外観察の場所と日時、および、抱っこが観察された親子連れの組数を示したものである。冬の方がやや観察事例が多いが、これは冷夏だった1993年の夏の観察日に比べ、1994年2月から3月の冬の観察日は何れも天候に恵まれてどの観察場所も多くの人出で賑わっていたためである。

表1 観察場所・日時・天候および観察された親子連れの組数

場 所 (略称)		東山動物園 (東 山)	名古屋港水族館周辺 (名古屋港)	上野動物園 (上 野)
夏 季	年月日(曜日)	1993. 7. 25(日)	1993. 8. 1(日)	1993. 8. 5(木)
	観察時間	11:00-14:30	13:00-17:00	11:00-16:30
	天 候	雨のち晴	晴	晴
	観 察 数	26(2)	55	23
冬 季	年月日(曜日)	1994. 2. 27(日)	1994. 3. 13(日)	1994. 2. 11(金・祝)
	観察時間	11:00-14:30	11:00-15:00	11:00-14:00
	天 候	晴	晴	晴
	観 察 数	43	37(4)	57(4)

() 内の数字は観察事例中、父母ともに子どもを抱いていた親子連れの組数

何れの観察でも35mm写真撮影により、親が子どもを抱いている場面を記録した。この方法はHews¹⁾が世界の各所で人々の姿勢を記録したときに用いた方法になったものであるが、短い時間に出来るだけ多くの被観察者に気づかれずに撮影を行い、一時的な姿勢の記録資料を得るには簡便で使いやすい方法である。資料の分析はすべてこの観察で得られた写真資料を用いて行った。また、写真資料の分析から得られたデータの数量的処理と分析にはNEC PC-9801 BX3および、統計解析ソフトHALBAU-4を用いた。

結果および考察

1. 親子連れの実態

子どもを抱いていたのが父親か、母親か、その数を比較した結果を表2に示した。観察場所によりやや差はあるものの、夏に関しても冬に関しても父親が抱えている例が母親の2倍を超

表2 子どもを抱いていた父親と母親の数

	夏 季		冬 季		全 体		合 計
	父親	母親	父親	母親	父 親	母 親	
東 山	22	6	32	11	54(21.5)	17(6.8)	71(28.3)
名 古 屋 港	36	19	28	13	64(25.5)	32(12.7)	96(38.2)
上 野	18	5	40	21	58(23.1)	26(10.4)	84(33.5)
合 計	76	30	100	45	176(70.1)	75(29.9)	251(100.0)

人数(%)

えていた。動物園を親子連れで歩く場合、父親が子どもを抱くことが圧倒的に多いということはすでに犬飼²⁾が報告しているが、今回の観察資料を加えても同一の結果が得られた。

表3は抱かれている子どもが乳児か幼児かを外見上から判断してその数を示したものである。判定基準は、体つき等から明らかに歩けないと分かるもの、歩けるかもしれないがいわゆる「よちよち歩き」の段階と見なせるものは乳児に、身体が比較的大きく、靴を履いていてしっかり歩けそうなものは幼児と見なした。乳児は抱かれているか背負われているか、あるいは乳母車にのせられている例が殆どではあったが、抱かれている乳児が最も多かった。表3はその抱かれている乳児の数よりも幼児の数の方が多いことを示している。これはもともと動物園には乳児よりも幼児をつれて来ることが多いということにもよるが、動物園等では歩ける幼児でも抱かれる場合がかなり多いことを示していると考えられる。

表3 抱かれていた子どもの見かけ年齢別人数

	夏 季		冬 季		全 体		合 計
	乳児	幼児	乳児	幼児	乳 児	幼 児	
東 山	13	15	11	32	24(9.6)	47(18.7)	71(28.3)
名 古 屋 港	26	29	11	30	37(14.7)	59(23.5)	96(38.2)
上 野	7	16	12	49	19(7.6)	65(25.9)	84(33.5)
合 計	46	60	34	111	80(31.9)	171(68.1)	251(100.0)

人数(%)

表4は抱っこ用の乳児運搬具が使われているかどうかを見たものである。運搬具の使用例は東京の上野動物園では冬における使用例が若干みられるが、名古屋の東山動物園や名古屋港水族館周辺では冬も夏も使用例は少なく、季節による差もなかった。動物園を歩くようなとき、抱っこするのは一時的なことが多く、運搬具まで用いることは少ないためと考えられる。また、冬に運搬具の使用例が観察された上野動物園でも夏には観察されなかった。これは乳児運搬具が抱く人と抱かれる乳児が密着するようにデザインされているので暑い夏には使うのがためられるからであろう。

表4 乳児運搬具使用について

	夏 季		冬 季		全 体		
	あり	なし	あり	なし	あり	なし	合 計
東 山	1	27	1	42	2 (0.8)	69(27.5)	71 (28.3)
名 古 屋 港	2	53	2	39	4 (1.6)	92(36.6)	96 (38.2)
上 野	0	23	8	53	8 (3.2)	76(30.3)	84 (33.5)
合 計	3	103	11	134	14 (5.6)	237(94.4)	251(100.0)

人数 (%)

2. 親子の向き合い方と抱く位置, および, 腕の使い方

図1は観察された抱っこの姿勢を(1)子どもを支えるのが両腕か片腕か, (2)親子の向き合い方はいかがか, (3)抱く位置は右側か左側か中央か, という点から整理して示したものである. 図1に示したイラストの中には観察されなかった型もあるので実際にどの型が何例観察されたかについては表5に示した. 両腕による抱っこと片腕の抱っこを較べると両腕の抱っこが圧倒的に多いことが分かる. しかし, どのような場合に両腕で抱き, どのような状況で片腕で抱くかという点については事例数だけでは分からないので, 図2に父母による違い, 乳児を抱く場

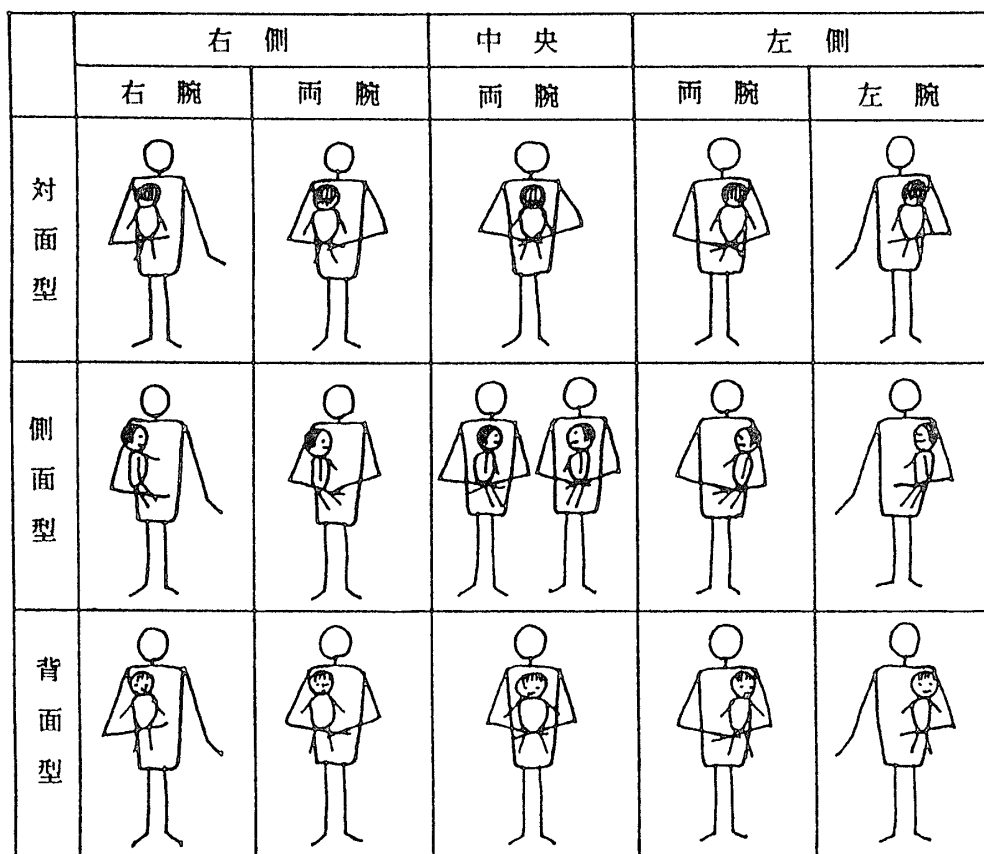


図1 片腕, および, 両腕の抱っこにおける親子の向き合い方と子どもを抱く位置のパターン

合と幼児を抱く場合、および、夏に抱く場合と冬に抱く場合に分けて例数を示した。何れの場合でも片腕の抱っこよりも両腕の抱っこの方が圧倒的に多いのであるが、 χ^2 -検定により比率の差の検定を行った結果、夏に抱く場合と冬に抱く場合では比率が異なり、夏には片腕による抱っこがやや増加することが分かった（有意水準： $p < 0.05$ ）。両腕でしっかり子どもを支える両腕の抱っこは親子の接する面が大きくなるので寒い冬には向いているが、暑い夏にはさけられて、親子の接する面がやや小さい片腕の抱っこが増加すると考えられる。

表5 片腕の抱っこと両腕の抱っこの比較：
 親子の向き合い方と子どもを抱く位置別の観察事例数(人)

向き合い方	片腕の抱っこ				両腕の抱っこ			
	右側	中央	左側	合計	右側	中央	左側	合計
対面型	0	0	4	4	29	79	18	126
側面型	8	0	5	13	40	14	29	83
背面型	0	0	1	1	7	3	0	10
合計	8	0	10	18	76	96	47	219

※ 両腕の抱っこの対面型と側面型については、向き合い方と抱く位置との間の比率に有意差あり（** $p < 0.01$ ）

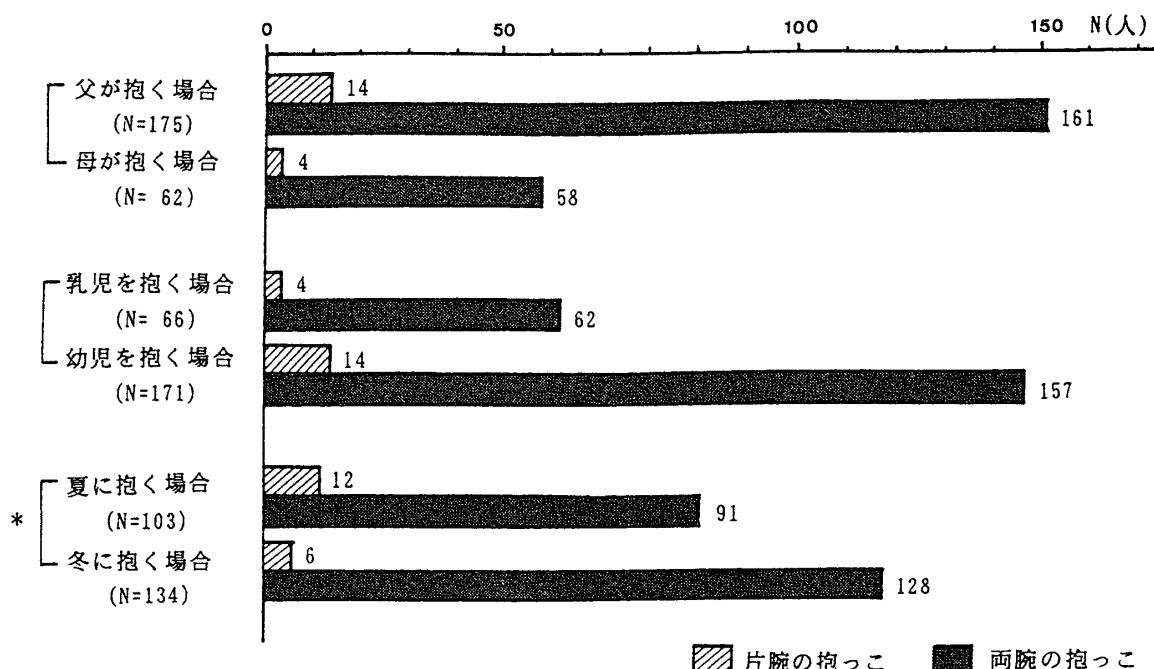


図2 片腕の抱っこと両腕の抱っこの比較：
 (上段) 父母による差
 (中段) 乳児を抱く場合と幼児を抱く場合の差
 (下段) 季節による差(有意差あり： $*p < 0.05$)

圧倒的多数を占める両腕の抱っこについて表5によって向き合い方と抱く位置(子どもを抱く親の胸の位置)の関係を見ると、向き合い方に関しては対面型が半数以上(126人, 57.5%)を占めていて最も多いことが分かった。また、抱く位置が胸のどの位置かという点に関しては中央が最も多く(96人, 43.8%), 次が右で(76人, 34.7%), 左は最も少なかった(47人, 21.5%)。

また、観察事例数の多い対面型と側面型について親子の向き合い方と抱く位置との関係を見ると、対面型では胸の中央に抱くことが多いのにたいして側面型では胸の右側に抱く事例が多く、向き合い方と抱く位置とは関連なしとはいえないことが分かった(χ^2 -検定, $p < 0.01$)。

図3は両腕の抱っこにおける腕の使い方の例を示したものである。両腕は左右そろえて用いられる場合(図3, 対称型A)と左右の腕の一方が下方に、他方がやや上方に位置して左右前腕が両側からほぼ平行に向かい合う場合とが見られた(図3, 平行型B)。表6は親子の向き合い方、抱く位置、および両腕の向き(使い方)を示したものである。これを見ると向き合い方や抱く位置に関わらず両腕は対称型に用いられていることが多い。対面型では胸の中央に抱い

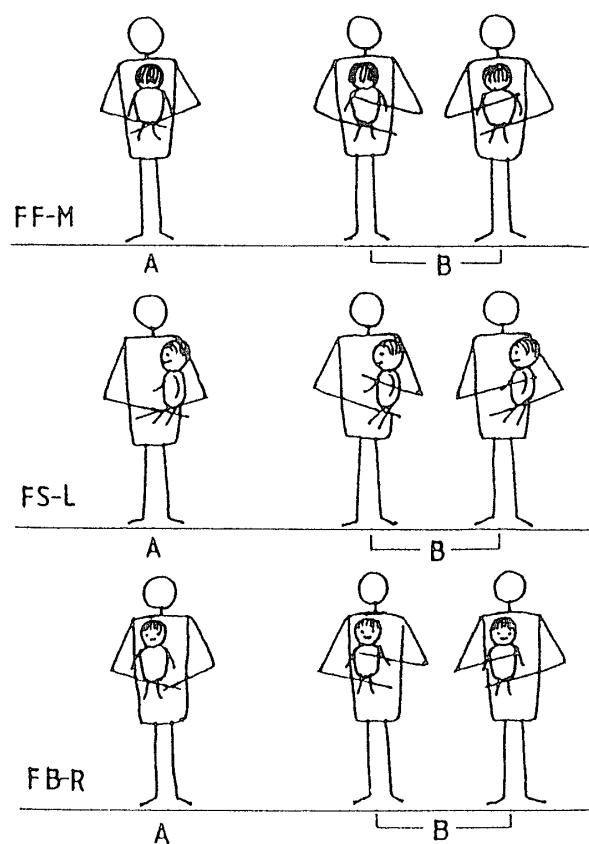


図3 両腕の向き, 対称型(A)と平行型(B):
上段より, 対面型・中央(FF-M),
側面型・右側(FS-L),
背面型・右側(FB-R)に関する例

表6 両腕の抱っこにおける親子の向き合い方、抱く位置および両腕の向き

向き合い方	抱く位置	左右両腕の向き		合計	
		対称型(A)	平行型(B)		
対面型	右側	25(19.8)	4(3.2)	29(23.0)	126 (100.0)
	中央	73(57.9)	6(4.8)	79(62.7)	
	左側	14(11.1)	4(3.2)	18(14.3)	
側面型	右側	38(45.8)	2(2.4)	40(48.2)	83 (100.0)
	中央	11(13.3)	3(3.5)	14(16.9)	
	左側	23(27.7)	6(7.2)	29(34.9)	
背面型	右側	5(50.0)	2(20.0)	7(70.0)	10 (100.0)
	中央	2(20.0)	1(10.0)	3(30.0)	
	左側	0	0	0	

て腕は対称型に用いる場合が最も多く(73人, 57.9%), 側面型の場合は腕を左右対称に用いて胸の右側に抱く場合が最も多かった(38人, 45.8%). 親の胸に子どもの背中が接する形をとる背面型の抱っこは事例が少ないのであるが, この型では両腕を対称型に用いて胸の右側に抱く例が最も多く, 半数を占めた(5人, 50.0%).

両腕の使い方に関しては対称型が主に子どもの臀部や下肢部を支え, 抱かれる子どもは姿勢保持を自分で行わなければならないのに対し, 平行型では子どもの軀幹部をしっかり支えることができる. 月齢の低い乳児や, 幼児でも眠っているような場合には姿勢保持ができないのでそのような場合には両腕を平行型に用いる必要がでてくるが, 子ども自身が親の肩や胸につかまったり, あるいは抱かれた状態で軀幹部を垂直に保てる場合は腕を対称型に用いても抱くことができるわけである. したがって平行型は乳児向き, 対称型は幼児向きと考えられるが, 腕を対称型に用いる例が多数を占めたということは観察事例中に占める幼児の割合が高いためと考えられる.

3. 抱く人, 抱かれる子ども, および, 季節による抱っこのしかたの差異:

両腕による抱っこについて

抱くときの向きあい方, 抱く位置, および両腕の向きについて父親と母親の抱き方を比べ, 図4に示した. 向き合い方については父親も母親も半数以上が対面型の抱き方をしており, 比率に有意差はなかった(父: 59.6%, 母: 51.7%). 両腕の向きも父親も母親も大多数が対称型で差はほとんどなかったが(父: 87.0%, 母: 87.9%), 抱く位置に関しては父親が胸の中央か右側に抱く例が多いのに対して(中央: 42.2%, 右: 30.8%)母親は中央か左側に抱く例が多く(中央: 48.3%, 左: 31.0%), 両者の比率に有意差が見られた($P < 0.05$).

同様に, 抱っこの向きあい方と抱く位置, および両腕の向きについて乳児を抱くときと幼児を抱く場合とで比較したものを図5に示した. 向きあい方と抱く位置に関しては乳児を抱く場合と幼児を抱く場合の差は見られなかったが, 両腕の使い方には有意差があり($P < 0.01$), 両腕を対称型に用いるのは乳児では74.2%であるのに対して幼児では92.4%に達していて, 幼児を抱く場合に両腕を対称型に用いる場合が多いことが明らかになった.

図6は抱っこのしかたを夏と冬で比較してみたものであ

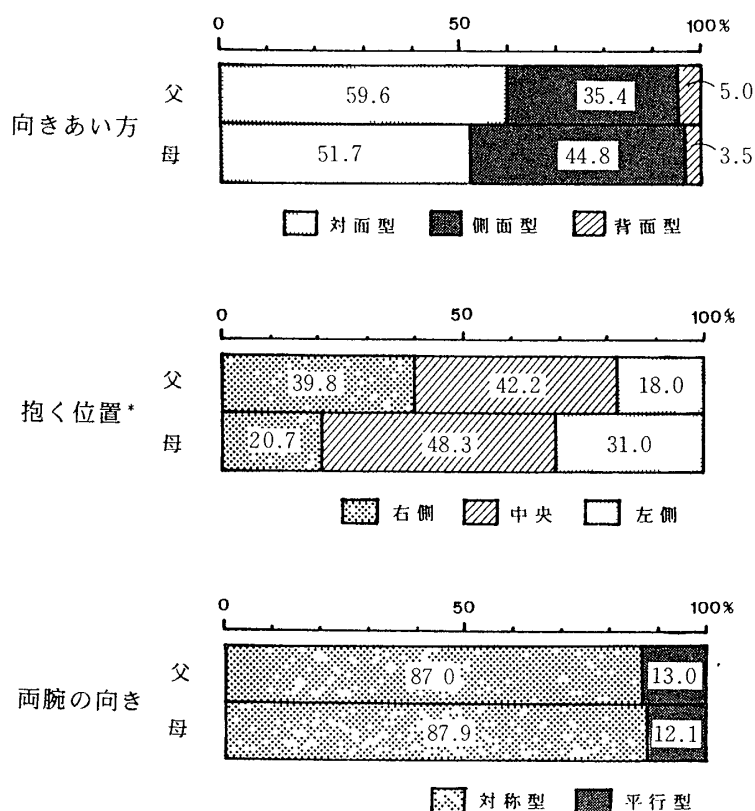


図4 父親と母親の抱き方の差異 (父: N=161, 母: N=58): 抱く位置に関して有意差あり (* $p < 0.05$)

る。親子の向きあい方には季節による差は見られなかったが、抱く位置に関しては冬は半数以上(51.6%)が中央に抱いているのに対し、夏は左右の比率が高まって中央が減り(33.6%)、抱く位置に季節差があることが分かった($P < 0.05$)。また、両腕の向きに関しては夏も冬も対称型が大半を占めるのであるが、夏が80.2%であるのに対し、冬は92.2%に達し、有意差が見られた($P < 0.01$)。

以上のように抱っこのかたを父母による差、抱かれる子どもの年齢による違い、季節差というように細かく分けて見てみると、場合によって抱き方に違いがあることが分かる。このうち、乳児を抱く場合は両腕を平行型に用いる場合が幼児に較べて多いという点に関しては先にもふれたように乳児の姿勢保持のために軀幹部を支えるという理由で理解でき、また、冬には子どもを胸の中央に抱く場合が多いということは、暑さ寒さという条件と直接関わっていることから分かる。しかし、抱く位置に関して父親と母親に左右差があるということの理由はいさきりしない。人間の行動や動作には人間ならではの特徴があり、荷物や子どもを運ぶ姿勢にもそれがあらわれていることを香原³⁾は詳しく説明しているが、まだ人間の行動の特徴で説明されていない問題も多く、「利き側」ということもその問題のひとつである。父親と母親の間に抱く位置の差があるということは子

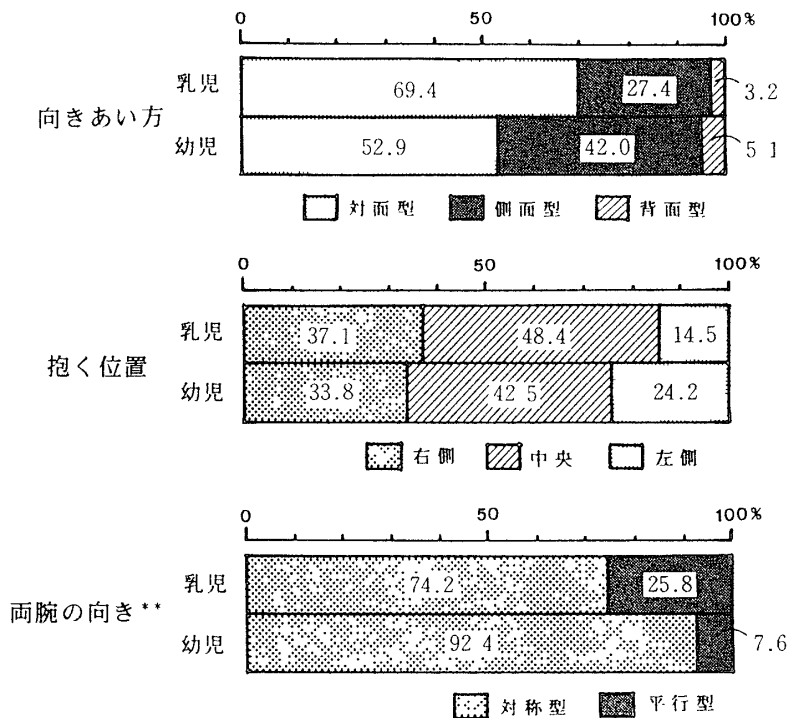


図5 乳児を抱く場合と幼児を抱く場合に見られる差異 (乳児: $N = 62$, 幼児: $N = 157$):
両腕の向きに関して有意差あり (** $p < 0.01$)

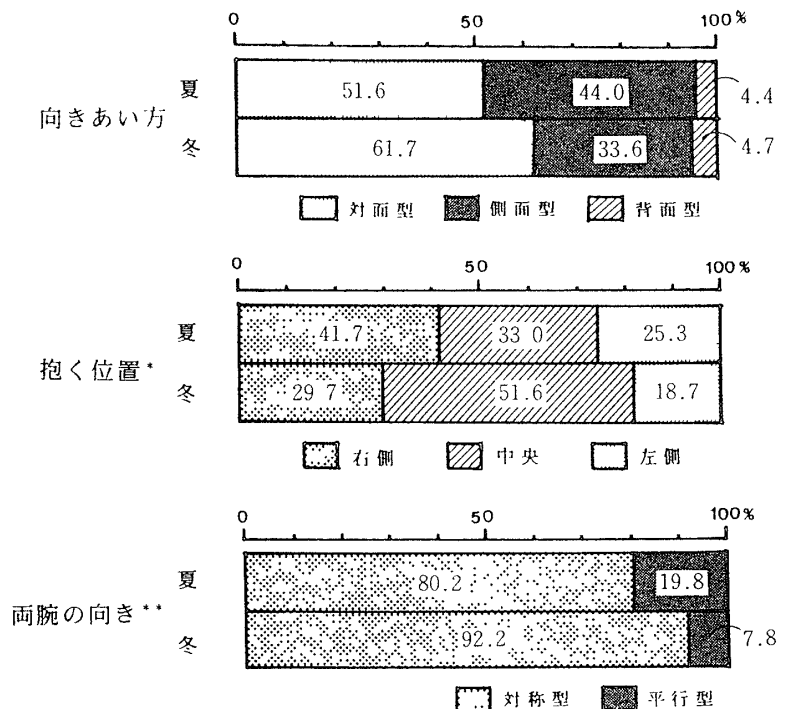


図6 季節による抱き方の差異 (夏: $N = 91$, 冬: $N = 128$):
抱く位置と両腕の向きに関して有意差あり
(抱く位置: * $p < 0.05$, 両腕の向き: ** $p < 0.01$)

どもを抱く姿勢にもこの利き側の問題が関わっていると考えられるが、この点の解明は今後に残された課題といえることができるであろう。

要 約

動物園や遊園地に親子連れで出かけて子どもを抱っこするような場合、どのように抱いているのであろうか。この点を明らかにするために名古屋の東山動物園、名古屋港水族館周辺と東京の上野動物園で夏と冬に親子連れの観察を行い、35mm写真で記録をとった。親子連れ241組の観察資料が得られ、写真資料を分析した結果は以下のとおりである：

1. 抱っこをしているのは母親よりも父親の方が多かった（父親：176人，母親：75人）。
2. 乳児運搬具を使用している例は少なく、とくに夏季に使用している例は殆どなかった。
3. 片腕による抱っこも少数例あったが、大多数は両腕による抱っこだった（219人，87.3%）。
4. 両腕による抱っこのうち大多数（126人，57.5%）は対面型の抱き方をしていたが、側面型も83人（37.9%）あった。しかし、背面型の抱き方をする例は少なかった（10人，4.6%）。
5. 抱く位置に関しては父親が胸の中央か右側に抱くのに対し、母親は中央か左側に抱く例が多く、有意差が見られた（ $p < 0.05$ ）。
6. 乳児を抱く場合と幼児を抱く場合にも抱き方に差があり（ $p < 0.01$ ），幼児を抱く場合は左右の腕を対称に用いて子どもを下から支えていたのに対し、乳児を抱く場合は左右の前腕をほぼ平行に上下にずらし、子どもの軀幹部を支えるように抱く例がかなり見られた。
7. 抱き方には季節差があり、夏に較べて冬には胸の中央で抱く例が多く、抱く位置に関して有意差があった（ $p < 0.05$ ）。また、冬には両腕を左右対称に用いる例が多く、腕の使い方にも有意差があった（ $p < 0.01$ ）。

文 献

- 1) Hews, G. W.: The Anthropology of posture. Scientific American. Feb. 1957, 123~132 (1957)
- 2) 犬飼博子：子ども連れに見る子どもと荷物の運び方，生活行動研究，1, 4~13 (1994)
- 3) 香原志勢：人類生物学入門，中公新書，pp.107~110 (1975)